

「なんだよ、まあまあって。元氣ならいいけど…いや、やっぱり疲れてるんじゃないか？なんだか目が眠そうだな」

「えっ…えっと…昨日遅くまで勉強してたから…かも。」

「ふうん…まあ留学生は色々大変そうだな。でも、あんまり無理はするなよ。」

「へへ、心配してくれてありがと。…フリッツは優しいな。」

「えっ、はは…べ、別に…俺たち友達じゃん！勉強なら付き合っし、他にも困ったことがあったら何でも言えよな！」

「…うん」

「あ、それ何飲んでるんだ？」

「コレ？ふう…飲んで当ててみなよ。」



「ほ、僕の危険日マンコで、おちんぼシコシコして子宮の中にいっぱい種付けしてくださいっ♡」

「ああっ？イイのかあ？お兄さんのクツツ濃いザーメンを危険日マンコに種付けなんかしたら、マメのお腹に赤ちゃん出来ちゃうんだぞお？」

「おっ…ひんっ♡い、いいっ♡…赤ちゃん欲しい…いっ！精子出してっ♡妊娠させてえ…っ♡」

「…ガキがっ!!クソ生意気なこと言いやがって!!」

「ぎゃうっ!!」

「本当にいいんだなあっ!!マンコの奥にドバドバ出しまくって孕ませるぞっ！学生で妊娠出産なんかしたら、これからの人生どうなると思っただっ!!わかってんのかてめえっ!!ああっ!!」

「い…っ♡い、いいいいいいっ…！な、な、何でもいいっ♡！赤ちゃん産むから、だから、中に出して！に、妊娠させて！孕ませて!!僕の人生、せんぶめちゃうちゃにしてええっっっ!!♡♡♡」

「よっしやああああ！よく言いやがったなこのクソビッチ!!ご褒美にマジでマジモンのキメキメ本気汁で確実に孕ませてやるからな!!覚悟しやがれ日本産の雌ガキが!!おらっ！おらっ！おらあああっ!!」

「あっ♡んひいつ♡あゝあへっ♡は…はひいん……♡」

「あゝうっめえ…」

「どうだあ？マメタロウ…おマンコペロペロされるの気持ちいいかあ？」

「いっ…いい…っ♡きもちいい…っ♡」

「もっと…もっとペロペロしてえ♡」

「はあゝ？気持ちいいのは、ケツ舐めだけかよ…ああ？」

「はえ…？」

「せっかく前も後ろも一緒にイジメてやってんのによお…」

「…あゝあ、じゃあマメチンポをゴシゴシするのは、もうやめちやおつかなあ。お兄たん、なんだか腕が疲れてきちゃったしい。」

「あっ…や、やめちやだあっ！」

「チンポっ！チンポもっ、マンコもっ、どっちもきもちいいのお…っ!!♡」

「あうう…やめないでえ…ちんぽもゴシゴシ、してくだじやいい…っ♡」

「...も、もういい？ね？早くしよ♥僕、朝からずつと我慢してたんだよ。」

「こらこら、マメタロウ。まずはフリッツ君にご挨拶しなきゃだろ？
一番のお友達だもんなあ？」

「...あつ♥ふ、フリッツみ、見てるの？さ、さっきぶり...元氣？
な、なんちゃって！.....へ、へへ...どうしよう、
コレ、フリッツに見られちゃつてるんだっ...♥
ば、ば、バレちゃった...っ!!フリッツに！セックス配信!!♥
あ、あは、は、恥ずかしくて死んじや、いそう...っ♥」

甘えた子供みたいな口調で、恥ずかしげに身をよじってそう言うものの、
顔はだらしない喜色に染まり、小ぶりのチンポをピンと直立させたままだ。
もしや、何か違法な薬でも使われているのではないだろうか。
...いや、きつとそうだし、でなければこんな....

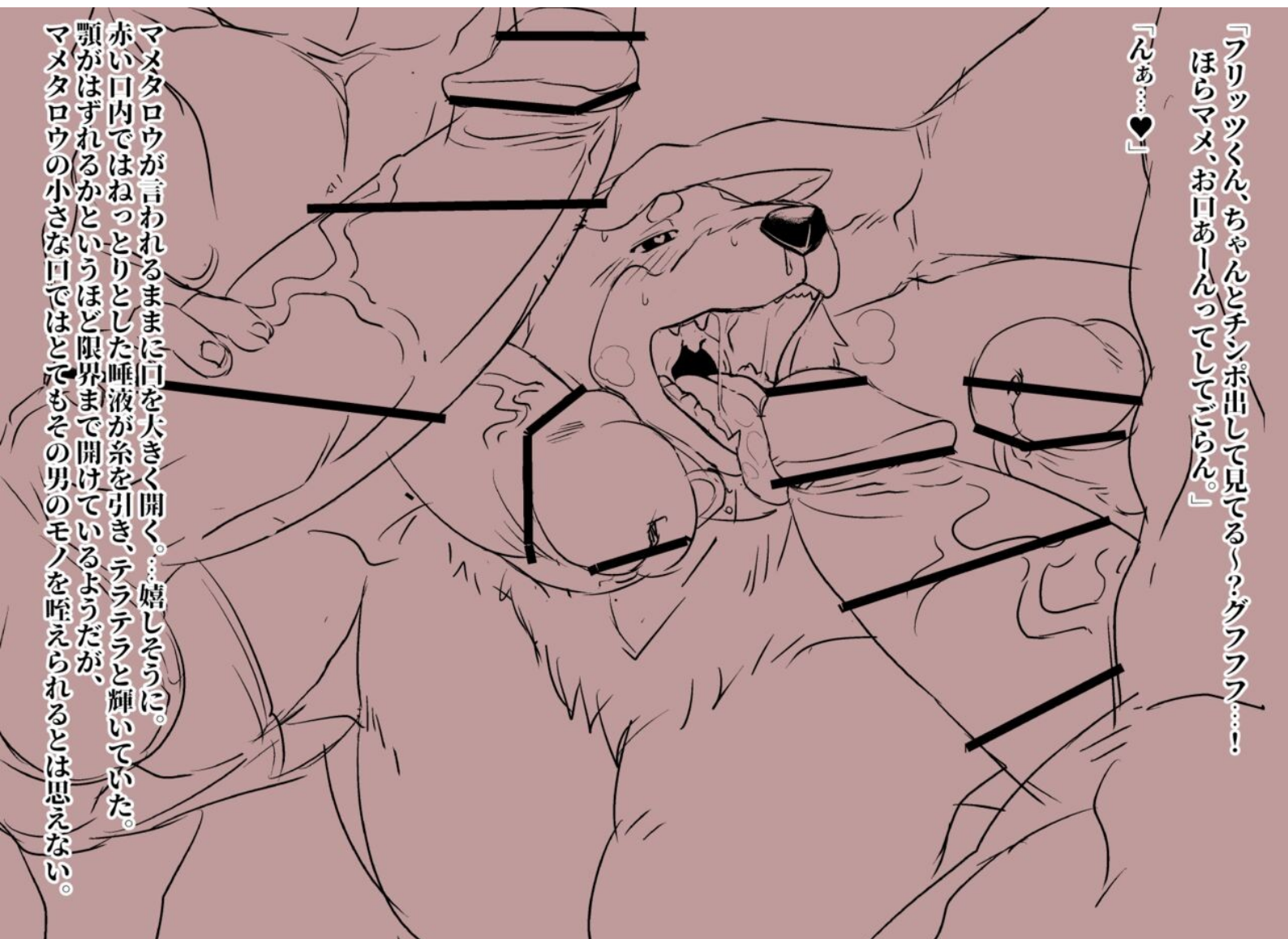
「一応言っておくけど、酒とかヤバイ薬は使ってないぜ。
地道な教育と生まれもった素質ってやつだな。
学校での天使っぷりは外面で本性は淫乱クソビッチの下変態なんだよ。
ほら...チンポを前にするだけでケツと尻尾をブンブン
振ってぶっ飛ぶんだ...かわいいだろ？」

次男だか三男だかが絶望的なことを告げる。

「フリッツくん、ちゃんとチンポ出して見てる〜？グフフフ…！
ほらマメ、お口あーんってしてごらん。」

「んあ…♡」

マメタロウが言われるままに口を大きく開く。…嬉しそうに。
赤い口内ではねっとりとした唾液が糸を引き、テラテラと輝いていた。
顎がはずれるかというほど限界まで開けているようだが、
マメタロウの小さな口ではとてもその男のモノを咥えられるとは思えない。



『よいしょお!』

『あっ♡』

『フリッツくん見える?これがマメタロウのおマンコです!毎日ハメ倒してるから、けっこう使用感出ちゃってるけど!ごめんね!そのぶんチンポによく馴染む、射精専用雌ホールに仕上がってるから期待してくれていいよ!!』

マメタロウを腹の生にのせた男の手が、尻の肉をグッと掴んで左右に広げる。尻肉の間にある穴は、明らかに排泄以外に使われたことがわかるほど淫靡な形に崩れていた

『ハア...ハア...♡』

『ぼ、僕のケツマンコ、フリッツにみ、見られちゃってる...♡あ...う、あああっ、は、恥ずかしすぎて顔から火が出そうっ!こんなの...お、おへその下がキュンキュンしちゃうよ...っ♡』



『あ つ!♥♥♥♥♥』

『…あれえ…? マメくうん? まーた先っぽ挿れただけで、ケツアクメをキメちゃったのかなあ? 今日こそは奥に挿れるまでメスイキは我慢しようねって、お兄さんと…約束しただろうがっ!!』

男がマメタロウの首とチョーカーの隙間に指を入れ、グツと頭を上につ引つ張り上げた。焦点のあつていない両目を見開き、口をはくはくとさせている様子から、全身に強烈な快感が走っているであろうことが見てとれる。

『ぎゃう!…ごめ、デホッ、ごべんなぎ…いつ♥ おま、おまんこ、気持ちよしゅ……ぎひいいつ!! あっ! やっ…やあっ!! いつ、今、うごかし、たりゃ…っ!!』

『約束やぶっちゃう悪い子は、おしおきしないとねえ。ほーら…、どんどん奥に入っっていくよお?』

マメタロウのちっちゃい、ちっちゃい、雄子宮はこのへんかなあ?』

『あっ♥お、おお…っ!♥当だつて…でかチンポの先、当だつてりゅっ!ぞ、ぞこおっ!ぎもちいいいいん!チンポ!気持ちよしゅぎるのっ!!♥いつ…、イギユツ!まんこイグっ!イクイクイクうっ!! またイツちゃう!!イクのツ!イクツ!!イグうううんっ!!♥♥♥♥♥』



